

# 『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたち

中村 ひろ子

## 1 絵引と民具研究

本書『日本近世生活絵引』東海道編を使って近世の運搬のかたちを読み取ることが試みたい。原資料である『東海道名所図会』には当然のことながら街道を往来するヒトとモノの様が描かれているが、それはヒトとモノが運ばれる様でもある。そこで運ばれているのは旅の携行品であり、あるいは商品や生産物であり、また人そのものであるが、それらを運ぶのにどのような運搬方法と運搬具が用いられたのだろうか。

本書に収められているのは50枚弱という限られた図像であり、東海道という限られた地域のものである。しかし、そこに描かれている姿に『東海道名所図会』編纂当時の運搬のかたちが反映されるとみてよいとすれば、近世の運搬の一端が読み取れよう。

渋沢敬三は『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂に際し、「この仕事は民俗学の中でもマテリアルカルチャーの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる点でだれでもいいから一度は完成しておくその後から勉強する方々の助けになると思う」（『絵引きは作れぬものか』『日本常民生活絵引』第1巻）と記しているが、この絵引を活用した民具研究への期待に充分応えてきたとはいえないであろう。ただ、数少ない成果の一つといえるのが『日本常民生活絵引』から運搬方法の変化を探った萬納寺徳子「絵巻物よみみた運搬法の変遷」（『民具論集』4、慶友社、1967）であるが、近世の運搬を読み取る上でも有効な資料となろう。

また、この運搬は人々のくらしに欠かせない行為

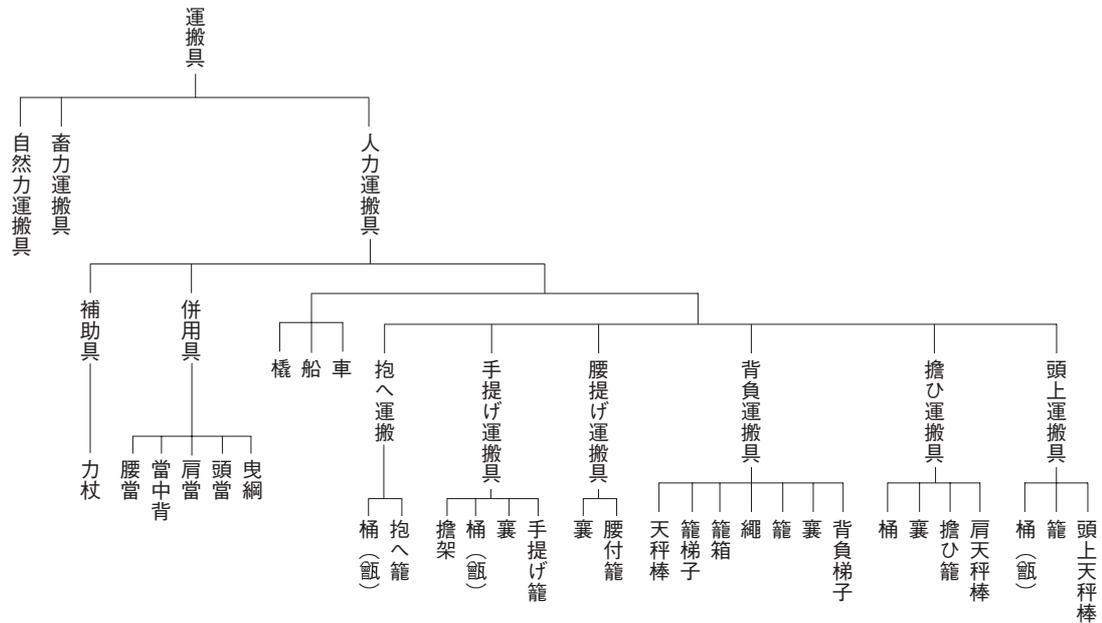
であり、多くは用具を伴うことから、その関心は民具研究の始まりとともにあり、渋沢敬三が主宰した日本常民文化研究所の前身アチックミュージアムにおける民具の収集と研究の当初からの中心課題であった。運搬法と運搬具の研究はこの運搬具の収集を通して進められたアチックの研究の進捗とともにあったといってよく、その後も民具研究のなかで蓄積のみられる領域である（木下忠「解説」『背負う・担ぐ・かべる』岩崎美術社、1989）。もちろん民俗研究にあっても一領域をなしており、今回の関心に限っていえば運搬の変化を跡付けた柳田國男の「棒の歴史」（『村と学童』朝日新聞社、1945、『定本柳田國男集』21所収、筑摩書房）が示唆に富む。

こうして、現存する運搬具を中心にした民具研究の中で明らかにされてきた運搬と『日本常民生活絵引』にみる中世の運搬、もしその間をつなぐものとして『日本近世生活絵引』東海道編から近世の運搬のかたちを提示することができるなら、それは渋沢のいう「マテリアルカルチャーの資料の一つとしてクロノロジーを明らかに」するながしかの試みになるのではないか。運搬への関心の中に絵引と民具研究、民俗研究が交差する可能性が見えるように思う。それはまた、本書の編纂に関わった者自らが本書を活用する試みにもなる。

## 2 『日本近世生活絵引』東海道編にみる運搬

絵引の有効性の一つは索引にある。絵引から運搬に関わる資料を得たいと思えばまず索引からの検索が考えられる。ただ試案本ということもあって本書の索引は『日本常民生活絵引』の「検索の便を考

表1 運搬具の分類（磯貝勇「背負梯子について（予報）」）



えて、適宜引きやすい用語や上位概念にまとめる』（『日本常民生活絵引総索引』）ことまではしていないため、検索にあたっては、①担う、背負う、運ぶなどの運搬の行為、②頭上運搬、両掛け、振り分けなどの運搬方法の呼称、③天秤棒、背負繩、風呂敷などの運搬具、④扶箱、行李などの運搬のための容器、そして⑤角樽、鋏、槍などの運ぶモノ、というように運搬が描かれていると思われる項目を広く検索し、一つ一つ画像に当たり運搬方法を確認するという作業が必要であった。検索した事例を分類整理したが、用いた分類指標は先に紹介したアチックにおける研究の中心を担った磯貝勇が提示した分類である（「背負梯子について（予報）」『民族学年報』1、1938）。今回は変遷や地域性をめぐって論議のある頭上運搬（具）、擔ひ運搬（具）、背負運搬（具）という3つの運搬法に絞ったが、運搬の全体像を見る上でも有効なので紹介しておく（表1）。こうして索引を分類して一覧したのが表2である（番号は本書のタイトル番号を示す）。

この索引一覧を一瞥しただけでも、担い運搬が数の上でも呼称やかたちにおいても多様で優位にあること、頭上運搬がほとんど見られないことが読み取れよう。そのかたちを見る前に先に紹介した『日本常民生活絵引』による中世の運搬を見ておきたい。

表2 『日本近世生活絵引』 東海道編にみる運搬一覧

A. 頭上運搬	18-4、34-15	
	天秤棒	35-21、37-23、38-36
	天秤棒を担ぐ	11-5、28-12、27-23、25-3
	棒手振り	18-5
	担い棒	13-18
	両掛け	3-16、8-12、9-25、15-23、35-16、39-9、41-19、44-15、45-15
	振り分け荷物	3-8、30-24、37-11
	肩に担ぐ	43-15
	風呂敷を肩に担ぐ	11-23
	山鴛篋を担ぐ	45-13
	刀を担ぐ	25-25
	荷を担いで渡る	8-15
B. 担い運搬	大布団を運ぶ	2-19
	角樽を運ぶ	36-3
	荷を4人で運ぶ	2-17
	サメを運ぶ	18-11
	扶箱	12-19、14-9、16-21
	長持	2-6
	行李	15-28、23-8
	風呂敷包み	22-25
	猪	1-9
	槍	2-13、7-8、8-7、41-21、45-8
	弓	8-8
	風呂鋏	43-18
	鋏	34-7
	鋤	34-7
C. 背負運搬	背負い繩	12-30
	背負い紐	37-2
	荷を背負う	45-11
	風呂敷包みを背負う	9-8
	風呂敷を担う	16-14
	風呂敷で担う	11-26
	莫産を丸めて担う	39-12
	風呂敷	2-18、3-7、38-43
	行李	37-13
	息杖	6-1、12-23
	息杖で荷を支える	37-3

表3 『日本常民生活絵引』にみる運搬法（萬納寺徳子「絵巻物よりみた運搬法の変遷」）

時代区分	運搬法	頭上		背負	かつぎ				馬	牛	牛車	計
		女	男		杵(一人)	杵(二人)	天秤	無道具				
平安時代末期	%	55.2		24.2		10.3		10.3				100
	例	15	1	7		3		3				29
鎌倉時代前期	%	16.5		44.4	18	6		4.5	6.8	3	0.8	100
	例	18	4	59	24	8		6	9	4	1	133
同後期～室町初期	%	14.6		23.8	32.1	2.3	3.6	13	8.3		2.3	100
	例	7	5	20	27	2	3	11	7		2	84
小計(例)		40	10	86	51	13	3	20	16	4	3	
合計(例)		50		86	87				20		3	246

### 3 『日本常民生活絵引』にみる運搬

萬納寺は『絵巻物による日本常民生活絵引』に使用された絵巻を、描かれた時代によって平安末期、鎌倉前期、室町の3期に分けた上で、①頭上（男・女）、②背負、③かつぎ（一人杵・二人杵・天秤・無道具）、④馬、⑤牛、⑥牛車に分類し、それぞれに描かれた頻度を件数という形で集計することにより（表3）、それぞれの時代における運搬法の優位と変化を読み取っている。何をもって1件として集計したかの問題はあろうが、各絵巻に描かれた運搬のすべてを数え上げることの困難さを考えれば、切り取られた図像からなる絵引だからこそ可能だったのだといえよう。

この集計結果から萬納寺は「平安末期には女の頭上運搬が顕著で、鎌倉前期になると背負い運搬が多くなり、鎌倉後期から室町初期にかけてかつぎ運搬が目立ってくる。とりわけ一人杵が三分の一を占めることは注目される」と、背負い運搬から担い運搬への移行をみている。さらに近世前期の運搬についても『洛中洛外図』などを用いて集計し「江戸前期に挟み箱が現れ、かつぎ運搬の比率は高まり、背負は後退し」、「江戸前期までは京都付近においては頭上運搬がまだ一般的であった」ことを指摘している。

もう一つ興味深いのが分類である。民具研究の視点から儀具が「擔ひ運搬具」を「肩天秤棒・担い籠・囊・桶」に細分したのに対し、萬納寺は「かつぎ」として「一人杵・二人杵・天秤・無道具」と分ける。萬納寺の分類は運搬具を見ることなく絵引に描かれた運搬の形を整理するためのものである。肩

担い運搬には棒が使用されることが多いが、背負運搬が基本的に一人であるの対し、棒は二人以上でも用いられる。それが図からは見えるのである。また運搬具を用いない「無道具」も図からだからこそ見える運搬法であり、儀具の分類には登場しない。

もちろん儀具はこれらを充分承知の上で、収集した運搬具の分類を通してわが国の運搬方法の全体像をとの思いからの分類であろうが、モノから読み取れるものと、図像から読み取れるものとの違いの一つが見て取れる。

### 4 『東海道名所図会』に描かれた運搬

先の表2は『日本近世生活絵引』東海道編の索引を通して『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたちに行き着くことを試み、索引の表現を生かしながら頭上運搬、担い運搬、背負運搬という3つに分類した。ただ、そこから描かれた運搬の具体的な姿を捉えるのは難しい。

例えば同じ担い運搬といっても、棒を使うもの、直接担うもの、あるいは一人で担うもの、二人で担うものがあり、また「両掛け」「振り分け」といった当時の呼称で記されたものが、どのような方法であるかはわかりにくい。表2をこの運搬方法と運搬具の読み取りやすい形に再整理したのが表4である。また、先の萬納寺に倣って頻度、優位性を表す手がかりの一つとして本書の46場面のうちの該当運搬法が描かれている場面数を〈 〉内に示した。

表4『日本近世生活絵引』東海道編にみる運搬法

運搬方法		事例番号
A. 頭上運搬		<2> 18、34
B. 担い運搬 <41>	棒	杓（一人） <6> 12、14、16、22、36、46
		杓（一人・両掛け） <12> 3、8、9、15、23、25、35、36、40、41、44、45
		杓（二人以上） <3> 1、2、13
		天秤棒 <7> 11、18、25、27、35、37、38
	紐（振り分け） <3> 3、30、37	
	風呂敷 <2> 11、43	
	用具不使用 <7> 2、7、8、25、43、45	
C. 背負運搬 <12>	背負紐・縄 <5> 6、12、23、37、45	
	背負籠・箱 <1> 39	
	風呂敷 <6> 2、3、9、11、16、38	
計	<55>	

①頭上運搬

頭上運搬が運搬方法の中では早くに姿を消し、限られた地域や女性の行商・祭事・神事に残ったことが知られているが、ここでも一つは三島大社のお田打ちという神事に登場する。もう一つが日本橋魚市場内での魚の運搬に使われている例である。市場から外への魚の移動には天秤を使う姿が多数描かれており、ここでの頭上運搬が市場内という短距離の移動に天秤棒にさげるといふ手数をかけずに頭上に載せて移動するという簡便な方法としてあったことがうかがえる。

②担い運搬

描かれた運搬の多くが肩を使った担い運搬である。棒、紐、風呂敷を使うか、荷を直接担う方法を取るが、特に棒の使用が顕著であることがわかう。柳田はこの棒を「オコ・オーコ・杓」・「サス」・「天秤棒」の3つに分類しているが、見られたのは杓と天秤棒であり、棒の両端を尖らせて直接荷に差し入れるサスは確認できていない。

まず杓を一人で担う場合として、「両掛け」と呼ばれた棒の両側に行李や風呂敷包みなどに入れた荷を括りつける方法と、挟箱、風呂敷包みなどを棒の片側のみにつける方法とが見られた。ともに旅の定番ともいえる頻度で登場しているが、大きくて重い荷には2名あるいは4名、6名で杓の中央に荷を下げて移動する方法がとられており、長持、猪、植木

などをこの方法で運んでいる姿が見える。

もう一つの天秤棒は杓と比べる数は多くない。旅の携行品というより魚の運搬と行商に用いられていることが見える。少し時代は下がるが『守貞謄稿』には豆腐売、菜蔬売、花売、油売、鰻蒲焼売、甘酒売といったさまざまな行商人が天秤棒で商う姿が多数描かれているところをみると、数の少なさは町中ではなく街道を描いたものだからであるようにも思える。

このほか棒を使用しない担い方の一つが「振り分け」と呼ばれる荷造りした2つの荷を紐でつなぎ肩の前後に振り分けて運ぶ方法で、両掛けと比べ比較的少量で軽い荷に用いられている。また槍、刀、三味線といった長尺のものや布団、籠など容器不要なものは直接担っていることがわかる。

③背負運搬

背負運搬は、担い運搬に比べて使用例が少なく、背負紐を用いるか風呂敷を用いるかのどちらかであり、背負運搬具として記憶に新しい背負梯子や背負籠は確認できなかった。背負梯子が近世に存在したことは知られているが、先の礪貝も指摘するように「使用されたのは可成り近い時代ではなかったか」とも考えられよう。

これに対し背負紐は背負梯子や背負籠に比べ、荷のかたちや大きさにいかようにも応じることができ、背負いの基本ともいえるものであるが、描かれて

いるのは俵や梱包された重く大きな荷を背負った運搬を生業とする人々であり、荷の重さから息杖を使って立ったまま休息する姿である。また、風呂敷包みは柳田が「棒の改良」とともに近世が考え出した「手数が今までより少なく、効果が今までより大きい」と記しているが、確かに平結びして残る二隅を用いて背にかけるといった容器と運搬具をかねる簡便な方法であり、小さく軽い携行品に、とりわけ女性に多く用いられている姿がみえた。

以上、『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたちが、「頭上運搬はほとんど姿を消し、背負いに比して担い運搬の比率が高く、棒を中心に多様な姿をみせている」ことを見てきた。先に紹介した萬納寺の中世の頭上運搬から背負い運搬、かつぎ運搬への変化や、江戸前期にかつぎ運搬の比率が高まり背負いは後退した、という論に重なる結果といえる。この運搬方法の変遷については、早くから例えば「頭にのせることから、背に負うか、肩に担う方法へ移り……肩に担う方法が……一番多い」（安藤精一『講座日本風俗史』雄山閣、1960）などと語られてきており、柳田も先の書で「棒の発達は歴史としては新しい」「いろいろの新しい運搬方法を、近世は殊に頻繁に考え出して居た」としている。その意味では近世の図像資料から、その論証となる資料を提供したことにはなっただであろうと思う。

しかし、絵引編纂に携った宮本常一は、そこから「今も京都北方はカネル風習が見られるところであり、同じ地域に背負う風習も古くあったということを変遷と見るか、いろいろの運搬法が並存してきたとみるか……おそらくは並存」（『絵巻物にみる日本庶民生活誌』中央公論社、1981）、という読みとりを示しており、また木下忠の運搬の民俗地図編纂を通しての「日本全域が従来いわれているような一系列の変遷をたどったわけではなからう」（「民俗地図をめぐる」『民俗学評論』13）との指摘は民具や民俗資料が示しているところでもあり、『東海道名

所図会』に描かれた担い運搬と背負運搬を運搬方法の変遷という文脈の中で論じてよいのかの判断は難しい。近世に描かれた図像資料は豊かである。各地の資料との比較検討を待ちたい。

また、運搬は人々のくらしのあらゆる場面に関わる行為である。人はモノを移動する必要に迫られたとき、どのように方法を選ぶのだろうか。モノの形、大きさ、重さ、材質、あるいは移動の距離や地形、運ぶ人の性別や年齢、階層、運ぶ目的、時代や地域といったさまざまな状況の中で選択する。今回は『東海道名所図会』に描かれた多様な人々の選んだ運搬方法の紹介にとどまり、描かれた人や状況などからそのかたちを選ばせたものを読み取ることはできなかったが、そこに「文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる」だけでなく、「モノのみでは解りにくい」「モノのみからでは見えない」ものを見る図像資料の可能性があるように思う。

また、最初に述べたように本論は『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたち」という表題であるが、直接『東海道名所図会』の全頁を読み取った結果ではない。あえて『日本近世生活絵引』東海道編を通して「東海道名所図会」に描かれた運搬に出会うという形をとった。絵引が他者による切り取りという選択を経た資料であるゆえに対象に近づくに有効な手がかりとなりえるという絵引の有効性の一つを再確認したいと思ったからである。しかし、今回は『絵巻物による日本常民生活絵引』とは異なり原資料に当たることが容易で、しかも1冊という量であったため、他者ではなく自ら運搬というテーマに沿って『東海道名所図会』から直接切り取ることとの比較に思いが及ぶ作業であった。あらためて、絵引という形で切り取られたものと切り取られなかったもの、特に切り取る側と利用する側にまたがることになった者としては、切り捨てたものとどう向き合うかという課題を再確認する試みでもあった。

（なかむら・ひろこ）